



作家——

アガサ・ミラー—クリスティー・マローワン

*O! ma chère maison; mon nid, mon gîte,
Le passé l'habite . . . O ma chère maison*

「ああ、いとこのわが家よ、私の巣、私のねぐら」——史上最高のベストセラー作家アガサ・クリスティーが自叙伝冒頭で引用しているジュール・ブリュイエールの歌は、彼女にとって家がどんなに大切だったか、端的に言い表わしている。彼女が「幸せな家」と呼んだデヴォン州トーキーの生家アシュフィールドから、ダート河畔の「夢の家」グリーンウェイまで、生涯に住んだ家は「さまざまな現実を生み、思い出を育て」彼女の存在と作品の基盤となった。アガサが所有した家、慣れ親しんだ家は、故郷の町や村と共に小説の題材や背景になっている。現在ナショナル・トラスト所有で、2009年に一般公開されたグリーンウェイは、アガサの生活を詰め込んだ“蔵”であり、愛するデヴォン地方の家。著名人のプレッシャーから逃れる避難所として、ほぼ最期の時まで好んで滞在した場所だ。グリーンウェイを訪れば、ミステリー作家アガサ・クリスティーの背景を知ることができる。とはいえクリスティーの創造的な生涯の口火が切られた場所といえば、生家のアシュフィールドだ。

没後刊行（1977年）の自伝によると、アガサの想像力は

トーキーのアシュフィールドにある自宅の庭で芽生えた。芝生や林、人目のない秘密の場所や隠れ場所がふんだんにある庭は、彼女にはお話を無限に紡ぎ出せる、魔法の場所だった。そこで思い描いた夢、演劇もどきの「ごっこ」遊びは、後の稀代のストーリーテラーの土壌となる。家も大きな意味を持つ。ままごと遊びで家を取り仕切る主婦を演じ、それが生涯失わなかった室内装飾や設計、家の取得に対する情熱につながっていく。アシュフィールドはその後のアガサの生活に、強い影響力を持ち続けた。厩改造のコテッジから泥レンガの小屋、現代的なフラット、邸宅とさまざまな家に住みながらも、アシュフィールドの影はどこへもついて回った。

アガサ・クラリッサ・ミラーは1890年9月15日、フレデリック・アルヴァ・ミラーとクラリッサ（通称クララ）・ミラーの娘として誕生。第3子だったが、姉のマジと兄モンティがその時それぞれ11歳、10歳とずっと年上だったため、1人っ子同然だった。姉と兄が学校に行っている間、アガサは自分で遊び友達を見つけて、自分で遊びを創り出すことを覚える。彼女が思い出せる一番古い記憶は、遊び相手集め。手はじめは「子ネコちゃんたち」だった。ばあやに、その秘密の世界をメイドのスーザンにしゃべられた時には、ひどく

子どもの頃のアガサ・ミラー